

19 世紀末のバンコックにおける香港上海銀行の活動

西村 雄志（関西大学）

本報告では、香港上海銀行(以下 HSBC)がバンコックに支店を設置した 1888 年から、シヤムが金為替本位制に移行し、同時にシヤムに進出していた外国銀行から銀行券を発行する権利が取り上げられた 1902 年までの時期を中心に、バンコック支店がどのような活動を行っていたのか検討する事を主たる目的としている。

まずシヤムの貿易環境を概観してみる。周知の様に、20 世紀初頭のシヤムで最も大規模に取り扱われていた商品は米である。その規模の一例を挙げれば、1899 年から 1902 年の 3 年間の平均で 582 千トン、1910 年と 11 年の 2 年間の平均で 837 千トンであった。また米を含む貿易総額を見た場合、1898 年から 1900 年の 3 年間の平均で輸入 2.53 百万英ポンド、輸出 3.14 百万英ポンドであったのに対し、1911 年から 1913 年の 3 年間の平均は、輸入額が 5.61 百万英ポンド、輸出額が 7.03 百万英ポンドと急激に伸びており、成長率は年 6.4%に達していた。また輸出入の仕向地を見てみると、シンガポールと香港が特に大きく、1902 年で見えた場合、輸出額の 48%が香港向け、38%がシンガポール向けであった。

HSBC の他にバンコックに支店を設けていた外国銀行にチャータード銀行とインドシナ銀行が挙げられる。1906 年には政府の強い支援を得て設立されたシヤム商業銀行が設立されており、これら 4 つの銀行が第一次世界大戦前のシヤムにおける銀行業務の中核を担っていた。それら銀行を 1913 年段階の資産総額で比較すれば、インドシナ銀行がチャータード銀行や HSBC よりも大きい。しかし、HSBC の場合、ポンド建手形の買入残高と銀ドル建の買入残高がほぼ同額になっており、他の銀行より顕著なアジア間貿易における HSBC のファイナンスの特徴を示すものと言える。

上述の様に、金為替本位制に移行した 1902 年まで、3 つの外国銀行には銀行券を発行する権利が付与されていた。しかし、実際の流通額は小規模に止まっており、1902 年 12 月の段階で流通額は 330 万バーツ(253 千英ポンド)であった。その規模は、同時期の貴金属貨幣の流通額と比較して、大変少ない額であった。また銀行券の流通額はバンコック周辺に限られており、このような銀行券の状況は香港や英領マラヤ(海峽植民地を含む)でも同様であり、英領インドの場合は政府紙幣であるものの、紙幣の流通範囲が都市部に限られていた点は同じであり、20 世紀初頭のアジア各地で見られた特徴と言える。本報告では、HSBC のバンコック支店の経営について、同時期に発展していたアジア間貿易の発展を踏まえて描くと同時に、この時期に中央銀行が存在していなかったシヤムにおいて、HSBC が幣制のなかでどのような役割を担っていたのか、その特徴を描き出せればと考える。